

企画展

かぶりもの

人はなぜ、帽子をかぶるのでしょうか…

帽子は強い日差しや寒さから人の頭部を守る大切な衣料で、古代より人々は頭を覆うものを身につけていました。また、オシャレの引き立て役であり、集団を区別したり、地位や職業を示すシンボルでもあり、労働の現場では防災や清潔を保つための必需品となっています。一方、近年まで髪に力があると信じられ、櫛・簪（クシ・カンザシ）は靈力を持つものとして頭髪を飾っていました。

本企画展では帽子の他、笠・頭巾など頭部をおおう「かぶりもの」と髪飾りを取り上げその歴史と変遷をたどり、多様な「かぶりもの」を紹介します。



蕪山笠



トンボ笠



三島町凱旋祝賀会余興（嫁入行列）昭和初期



福尾帽子店（現、市ヶ原郵便局の地）大正8年（1919）ごろ、伊豆の帽子店の草分け

「かぶりもの」の種類

冠 かんむり: 聖徳太子により冠位十二階が制定されてから、平安時代の正装の束帯へとつながる公家の正式のかぶりものです。纓が特徴です。

烏帽子 えぼし: 平安時代、階級や貧富によって多少違いはあっても烏帽子をかぶりました。武士の時代、成年式である元服で初めて烏帽子をかぶる風習がありましたが、このかぶせ役を烏帽子親といって一門の長者や高位のものが選ばれました。

帽子 ぼうし: 旧来は、女性があらたまった行事のときにかぶったものでした。揚げ帽子は角隠しと呼ばれ、現在でも花嫁がかぶっています。明治以後は洋風なかぶりものをいうようになりました。

頭巾 すきん: 布を袋形に作り、頭や顔をおおい、防寒・防暑として頭の保護、外出の時のほこりよけに使いますが、時には人目を避けるためにも使いました。

手拭 てぬぐい: 手や顔、身体などをふく布ですが、頭にかぶり、鉢巻・ほおかむり・姉さんかぶりなど、農作業用・防寒用として使いました。

笠 かさ: イグサやスゲ・竹など植物性の材料で作られ、雨雪を防ぎ、日光をよけ、顔面を隠すために使われました。作り方に、編笠、組笠、縫笠、押笠、張笠、塗笠などの種類があります。



高位の正装に使われる繁紋冠（しげもんかんむり）



「お田打」に見える神官の烏帽子



綿帽子をかぶる花嫁



てぬぐいかぶりをしたの水田作業



昭和初期よりはやったかんかん帽（左）とパナマ帽（右）



モダンガール（モガ）のかぶった昭和はじめの帽子



三島の少年野球チームの野球帽



髪の手入れからおしゃれへ変わったかんざし、こうがい、くし

「かぶりもの」のうつりかわり

「かぶりもの」は『魏志 倭人伝』によると西暦三世紀頃の日本では、頭に布を巻いていたとの記述があります。また古墳時代には、埴輪などからつる草、麻布、獣皮などで作っていたとかがえます。

その後、聖徳太子により冠位十二階の制度が作られ、冠の色や材料によって官人の位などを示しました。

平安時代には、烏帽子ができました。このころは一般庶民でも烏帽子をかぶることがエチケットで、かぶらないことが恥とされ、寝るときにもかぶりしました。

武士の時代になると、戦乱のためにかぶりものを着けない習慣が起り、戦闘用の兜が発達しました。

江戸時代、天下泰平の世になると、笠・帽子・頭巾など種類が豊富になりました。また手拭かぶりが発達し、鉢巻・ほおかむり・姉さんかぶりなど広く男女に行われました。

明治になり男性の洋装化とともに、シルクハット、山高帽、学生帽などが広く一般にとり入れられ、女性の帽子も洋風へと急激にかわっていきました。日本の伝統的かぶりものは、神社、寺院や儀式にわずかに名残をとどめるだけとなりました。



烏帽子をかぶる幕府代官江川垣庵公



三味線をひき鳥追歌を唄う女芸人のかぶる鳥追笠（とりおいがさ）



兜（かぶと）と足軽の陣笠



戊辰戦争で使われた一文字笠



火消し装束の猫頭巾



「お田打」に見えるはちまき



明治時代の正装のシルクハットと略装の山高帽

三島のかぶりもの『一遍上人絵伝 三嶋社参詣の図』より

時宗の開祖一遍上人は遊行上人とも呼ばれ全国を旅し布教しました。一遍の生涯や、この旅の様子を描いたものが『一遍上人絵伝』(国宝)です。一遍上人が没して10年後(1292)に弟子の聖戒が詞書を作り、絵は法眼円伊により描かれ、全12巻の絵巻物となっています。写実性を重んじ、当時の生活実態をよく伝えているので、絵画史料として高く評価されています。

さて、一遍上人一行が三嶋社(現、三嶋大社)に詣でたのは弘安5年(1282)秋のこと、境内で踊念仏を披露したといわれます。『絵伝』を見ると、本殿前の幣殿に一遍上人と弟子達が座し、神池から境内にかけて、侍・僧侶・旅人などさまざまな階級の人々が参詣に訪れています。かぶりものによって、階級やその人の状況を推定することができます。



①武官の冠 ②編み笠 ③尼僧の帽子 ④侍烏帽子



①長烏帽子 ②編み笠 ③市女笠に被衣



①市女笠 ②僧侶の帽子



①侍烏帽子 ②編み笠



①被衣



①市女笠 ②長烏帽子 ③修験者の頭巾

伝統とかぶりもの

人の一生の通過儀礼、いわゆるハレの日には伝統的な衣裳を身につけ祝います。この時のかぶりものも地域によって特徴があり、意味があります。

また、現在、伝統的なかぶりものを使用している職業はさほど多くありません。

神職が祭礼の時着用する烏帽子・冠や、僧侶が行事で使用する帽子・足下帽などは伝統的なかぶりものといえます。これらのかぶりものは地位により、色・形・材質が区別されています。

明治以降、洋服の普及とともに帽子が一般的になります。軍人・警察官の帽子には地位階級が示されていました。現在でも警察官・消防職員の帽子は階級によりラインが異なります。



初節句



七五三の髪飾り



お稚児さん



花嫁の角隠し



三嶋大社分祭年男の侍烏帽子



喜寿（七十七の祝）の頭巾



時宗の僧侶の誌公帽子



足下帽（時宗の地位の高い僧侶のみが着用できる。）

働く人のかぶりもの — 現代 —

食品・薬品の製造においては清潔を求められ、髪の毛1本落ちることも許されません。このためネット・ヘアバンドなどで頭部をおおい、その上に作業帽をかぶります。

事故の危険が多い屋外での作業や建築現場ではヘルメットが着用されています。消火作業にあたる消防士のヘルメットには防災加工されたフードや防護マスクがついています。

多くの事業所では軽作業用に作業帽を使用しています。色やマークで事業所の特徴を出しています。

農民のかぶりものは、かつて手ぬぐいをかぶるか、トンボ笠（菅笠）でした。現在はムギワラ帽子や作業帽、女性達はフードのついた農園バイザーなどを使用しています。

この他、ナースキャップ（看護婦）、料理人の帽子、船員帽などが特徴あるかぶりものといえるでしょう。



船舶操縦士、作業員

バス運転士とバスガイドのベレー帽

鉄道駅長と駅員



消防署

警察署



薬剤、食品工場の衛生を保つ帽子



位が上げれば高さが増すコック帽



職業の象徴をあらわすナースキャップ



ファーストフード店員



会社や工場のシンボルとなるキャップ



仕事の現場で頭を保護するヘルメット

三島のかぶりもの『一遍上人絵伝 三嶋社参詣の図』より

時宗の開祖一遍上人は遊行上人とも呼ばれ全国を旅し布教しました。一遍の生涯や、この旅の様子を描いたものが『一遍上人絵伝』(国宝)です。一遍上人が没して10年後(1292)に弟子の聖戒が詞書を作り、絵は法眼円伊により描かれ、全12巻の絵巻物となっています。写実性を重んじ、当時の生活実態をよく伝えているので、絵画史料として高く評価されています。

さて、一遍上人一行が三嶋社(現、三嶋大社)に詣でたのは弘安5年(1282)秋のこと、境内で踊念仏を披露したといわれます。『絵伝』を見ると、本殿前の幣殿に一遍上人と弟子達が座し、神池から境内にかけて、侍・僧侶・旅人などさまざまな階級の人々が参詣に訪れています。かぶりものによって、階級やその人の状況を推定することができます。



①武官の冠 ②編み笠 ③尼僧の帽子 ④侍烏帽子



①長烏帽子 ②編み笠 ③市女笠に被衣



①市女笠 ②僧侶の帽子



①侍烏帽子 ②編み笠



①被衣

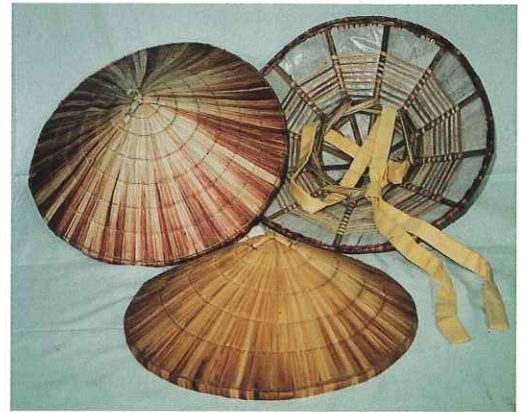


①市女笠 ②長烏帽子 ③修験者の頭巾

トンボ笠——沼津市大平——



トンボ笠をかぶり田植え



オオトン(左上)とコトン(下)とトンボ笠裏面

「トンボ笠」の名で知られるスゲ笠作りが、沼津市大平の集落で農閑期の副業として盛んに行われてきました。明治・大正の頃には、約300軒の農家のほとんどで作られていたといわれています。このトンボ笠は、日笠、雨笠として農作業に便利なものでした。

トンボ笠作りは、秋の収穫が終わり、春の農作業の始まる四月末まで行われました。その時期は、子供もスゲをさばく作業などを手伝って、夜なべで仕事をしました。男衆が竹で骨を作り、女衆がスゲの縫い付けと、作業を分担している場合が多かったようです。女衆はひとところに集まって話をしながら、電気の無い時代にも、石油ランプのあかりの下で、笠を縫ったものでした。

トンボ笠と呼ばれるのは、スゲ笠の頂部の笠を作っていく最後に残るスゲの部分をもとめたもので、三方向にY字形のトンボがとまったような形からきています。

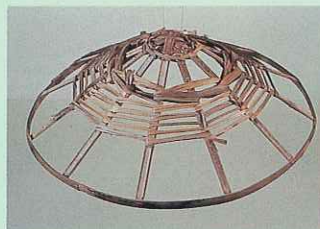
笠は「一カイ、二カイ…」と数えます。製品がまとまると、30～50カイを背負い、伊豆の修善寺など田方一帯から沼津の根方、原方面に行商に売り歩き、広く普及しました。



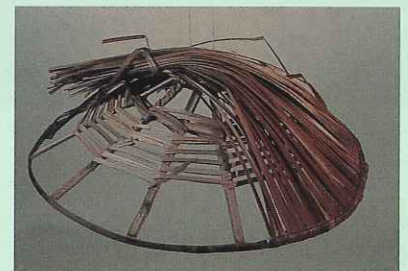
干したスゲ



骨作り 竹でワッパ(輪)とコボネ(縦の骨)を作る



シタガラミ
スゲをぬらしてコボネにからませる



ヌキツケ
ヌキ(縦方向のスゲ)をつける

出品協力者(敬称略・順不同)

小針 国明	鈴木 重男	明治ケンコーハム(株)三島工場
関 守敏	濱野 晃司	森永製菓(株)三島工場
楳 茂彦	室伏 松夫	横浜ゴム(株)三島工場
山梨 一恵		静岡県埋蔵文化財調査研究所
伊豆箱根鉄道(株)		沼津市歴史民俗資料館
伊伝(株)		富士市立博物館
三共(株)三島工場		三島少年野球連盟
学校法人鈴木学園		三島警察署
TE東海三島営業所		三島消防署
田福寺・光明寺・医王寺		三嶋大社
トラヤ帽子店		三島郵便局
東レ(株)三島工場		三島市医師会付属看護学院
富士コカコーラボトリング(株)		三島市教育委員会
マクドナルド三島店		

参考文献

『かぶりもの・きもの・はきもの』	宮本馨太郎	岩崎美術社	1968
『日本服飾考』	塩谷 壽助	金園社	1979
『大平の民俗-沼津市-』	静岡県史民俗調査報告書第三集		1987
『三島市誌』(下)	三島市		1959
『資料 日本歴史図録』	笠間 良彦	柏書房	1992

企画展・かぶりもの展／平成11年7月24日～11月17日
 発行者 三島市郷土資料館
 〒411-0036 三島市一番町19-3 楽寿園内
 TEL (0559) 71-8228 FAX (0559) 81-3730
 発行日 平成11年7月24日